

復興のパイオニア（復興女子編）

■ 活動を通じて思うこと

避難している方々に訪問活動でお話を伺うと、悩みは多岐にわたっています。その中には、答えを出すことができず、ただ傾聴せざるを得ないものも多くありますが、生活支援相談員の勉強会や情報共有を大事にして、職員の資質向上に努めてきました。現在、ホッとサロン「てとて」の参加者は、多い時には100人になりますが、今後の課題は、「避難している方々と福島市民との融合」です。

福島市内には様々な団体による活動が数多くあります。しかし、残念ながら、避難している方々の多くが地元住民向けの活動には参加していません。とはいえ、避難生活が長期化し、いつまでも居住地に馴染むことなく生活することは大変です。避難元と避難先にこだわらず、福島市内に住む方々全てと一緒に生活のできる環境をつくっていきたいと考えています。

また、避難元と避難先の行政の協力も重要です。私たち社協が活動を展開する場合、避難元行政と避難先行政のそれぞれと何度もやり取りを行うことがあります。基本である「誰のための何のための支援か」を常に考えながら、行政・避難元社協と一緒に活動したいと思っています。

■ 復興庁について

助成金はありがたいのですが、情報が現場まで伝わりにくいように思います。また、使い道が限定的という印象もあります。



現場への訪問日程の調整や電話での問合せで忙しい、生活復興支援室の職員の皆さん



「足で稼いでいます。」(大久保さん):訪問活動の際の会話のきっかけにも役立っているという大久保さんのユニークな靴下